富山市埋蔵文化財調査報告12

富山市東老田（ひがしおいだ）Ⅰ遺跡

発掘調査報告書

―店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―

2006

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 12

富山市東老田（ひがしおいだ）Ⅰ遺跡
発掘調査報告書

―店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―

2006

富山市教育委員会

例　言

1．本書は、富山県富山市東老田地内に所在する東老田Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、新栄建設株式会社が行う店舗建設工事に先立ち、富山市教育委員会の監理のもと(有)山武考古学研究所が実施した。
3．調査面積・期間・担当者は次のとおりである。

調査面積	478㎡
発掘期間	平成17年９月26日～平成17年10月15日
調査担当者	桐谷　慶・黒岩拓也（(有)山武考古学研究所所員）

4．本書の執筆はⅠ・Ⅲ・Ⅴを黒岩・桐谷、Ⅱを岩崎誉尋（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）が行い、責は文末に記した。
5．自然科学分析については、(株)パレオ・ラボに依頼し、その報告をⅣ章に収録した。
6．本調査にかかわる図面・写真・出土遺物等の資料は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。
7．現地調査から報告書作成に至るまで、次の方々・機関の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。
(社)富山市シルバー人材センター婦中支所、東老田自治会、老田地区センター、(株)日本テクニカルセンター、(有)新成田総合社

凡　例

1．挿図で使用する方位は真北、水平基準は海抜高、経緯度の数値は世界測地系である。
2．遺構の略号は、次のとおりである。
SB：掘立柱建物　　SK：土坑　　SD：溝　　P：ピット
3．平面図及び写真図版の遺物番号は、出土遺物番号と一致する。

目　次

例言　凡例　目次
Ⅰ　遺跡の位置と概観 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 3
Ⅲ　調査の概要 …… 3
　1．調査の方法 …… 3
　2．調査の経過 …… 3
　3．基本堆積土層 …… 3
　4．遺構 …… 4
　5．遺構出土遺物 …… 8
Ⅳ　自然科学分析 …… 10
Ⅴ　総括 …… 12
写真図版

Ⅰ　遺跡の位置と概観

東老田Ⅰ遺跡は、富山市街地から南西約10kmの富山市東老田地内に所在する。東老田地区は呉羽山丘陵の西側に広がる射水平野の南奥部に位置し、南西にはなだらかな射水丘陵群が広がる。

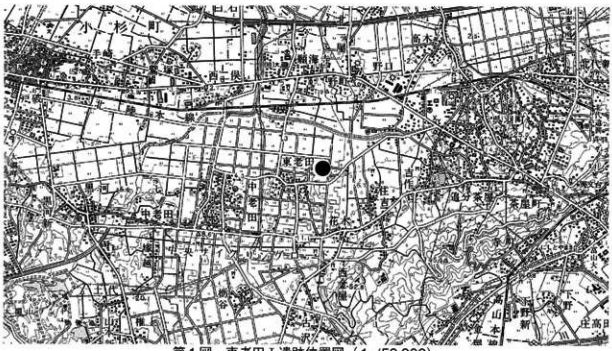
遺跡の立地する射水平野は、東の神通川と西の庄川に挟まれた東西約11km、南北約７kmの範囲である。縄文時代前期の縄文海進の頃、射水平野の大半にあたる海抜５m付近までが海中に没し、その後の気温低下に伴う海退の結果、放生津潟の周辺に湿原が現れた。平野部の標高は、放生津潟の水面とさほどの差がないため、川の流れが平野部で澱み、フゴ・アラワと呼ばれる沼沢地を形成した。その湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、現在の射水平野が形成された（小杉町教委　2002）。

今回の調査地は、遺跡範囲のほぼ中央部にあたり、主要地方道新湊・平岡線に隣接している。遺跡の周辺は水田や梨畑が広がる低地帯で、標高は４m前後である。

呉羽山丘陵から射水丘陵一帯にかけては、県内でも有数の遺跡集中地域として知られている。時代は旧石器から近世に至り、遺跡の種類も集落跡、生産遺跡、墳墓など多岐にわたる。平野部では縄文時代、弥生時代、古代の集落が形成され、丘陵部では傾斜地を利用した製鉄炉、炭窯、須恵窯などの生産遺構が数多く確認されている。この丘陵部の生産遺構群は、その膨大さや一貫性から一大コンビナートとの評価がなされている（富山市教委　2000）。

東老田地区では、縄文時代、弥生時代にも小規模な集落の存在が認められるものの、主体は奈良・平安時代の集落跡や生産遺構などである。特に注目される生産遺跡としては、本遺跡から南西約2.2kmに所在する奈良時代の栃谷南遺跡（12）があり、瓦陶兼業窯や製鉄関連遺構などが確認されている。しかし、９世紀後半以降になると集落の減少と共に、生産遺構の形成も衰退する。

中世に入ると黒河尺目遺跡（58）で集落跡、針原東遺跡（52）では方形館跡が確認され、その他、東老田・中老田地区でも珠洲焼や陶磁器等の出土が見られることから、鍛冶川流域に広範な村落開発が行われたことがわかる（楠瀬　1997）。



第１図　東老田Ⅰ遺跡位置図（１/50,000）

第２図　東老田Ⅰ遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）

１東老田Ⅰ　２中老田Ⅷ　３中老田南Ⅵ　４中老田南Ⅰ　５中老田南Ⅲ　６中老田南Ⅱ　７中老田南Ⅳ　８中老田南Ⅶ　９中老田南Ⅴ　10姫谷　11中老田南Ⅷ　12姫谷南　13中老田　14中老田Ｂ　15中老田Ⅶ　16東老田Ⅱ　17東老田Ⅳ　18東老田Ⅲ　19中老田Ｃ　20砂川カタダ　21砂川トクイノ　22東老田Ⅴ　23花ノ木Ｃ　24花ノ木Ａ　25花ノ木Ｂ　26西金屋Ⅱ　27西金屋　28西金屋窯跡　29下奥Ｂ　30吉沢窯跡　31吉沢窯跡　32吉沢　33杉谷Ｇ　34杉谷古墳群　35境野新　36杉谷67　37杉谷　38杉谷Ⅲ　39杉谷Ⅱ　40杉谷Ⅱ　41北押川スガマ　42北押川1号窯跡　43西押川　44北押川・嘉ノ股　45池多熊野社南　46池多西　47西二俣　48中老田Ⅴ　49中老田Ⅵ　50中老田Ⅱ　51中老田Ⅲ　52針原東　53黒河・中老山　54塚越貝坪　55畑総№16　56黒河新三十三塚　57畑総№17　58黒河尺目　59黒河　60高木南　61住吉北Ⅱ　62吉作１号経塚　63吉作北Ⅳ　64住吉Ⅱ　65住吉古墓　66黒河尺目西　67住吉神尾池　68花ノ木　69住吉Ⅲ　70表野　71塚越大沢Ⅱ　72塚越大沢　73畑総№23　74畑総№22　75畑総№24　76古沢東　77古沢東窯跡　78古沢宮の山　79法尻道　80太閤山ランド内№19　81土代　82太閤山ランド№26　83住吉新堤北　84金草電化農場前　85住吉新堤西　86住吉新堤南　87金草第一古窯跡　88金草３号窯跡　89西金屋Ⅲ　90西金屋窯跡　91二番金草Ａ　92二番金草Ｂ　93古沢下堤池東　94西金屋長尾塚古墳　95中老田Ｃ　96西金屋スキー場　97古沢Ａ　98古沢Ｂ　99草山Ｂ　100椎土　101北野　102山本

Ⅱ　調査に至る経緯

東老田Ⅰ遺跡は、昭和63年～平成３年に富山市教育委員会が実施した市内の分布調査で発見された遺跡である。その際には、縄文土器、土師器や須恵器、珠洲焼が採取され、縄文（前・後期）・奈良・平安・中世・近世の散布地とされた。遺跡は№72東老田Ⅰ遺跡として富山市遺跡地図に登録され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。この時点での埋蔵文化財包蔵地の範囲は約324,000㎡である。

これまで個人住宅・店舗建設等開発に伴う試掘確認調査・発掘調査を10件あまり実施しており、平安時代の粘土採掘坑などの遺構が確認されている。

平成17年５月、東老田地内において新栄建設株式会社から店舗建設計画について協議があり、999㎡について富山市教育委員会が試掘調査を実施したところ、古墳時代の遺構・遺物の存在を確認した。

工事計画と調整した結果、建物建設部分及び側溝部分478㎡の発掘調査が必要と判断された。発掘調査は緊急を要したため、民間発掘調査機関が担当し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが監理して実施することで合意し、平成17年９月、新栄建設株式会社、市教委、㈲山武考古学研究所の三者で協定を締結した。同年９月26日から発掘調査を着手、同年10月15日まで約１ヶ月かけて実施し、その後引き続き出土品整理を行い、平成18年７月31日に発掘調査報告書を刊行して終了した。

（岩崎）

Ⅲ　調査の概要

１．調査の方法

発掘調査は、試掘調査の成果に基づき実施した。調査区には公共座標（第Ⅶ座標系）に基づく10mの方眼網を被せ、グリッド呼称は公共座標の下二桁を用いた。

表土除去は重機で行い、包含層掘削は人力で行った。遺構の平面図・断面図の作成はデジタル実測とした。写真撮影は35㎜白黒ネガ、35㎜カラーポジ、６×７判白黒ネガを使用し、遺跡全体写真はラジコンヘリによる空中撮影を実施した。

２．調査の経過

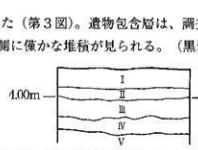
調査は平成17年９月26日～同年10月15日まで実施し、調査経過の概略は以下のとおりである。

９月26日　器材、施設等の搬入。調査区域を設定し、重機による表土除去作業開始。28日　重機掘削終了。公共座標設定。29日　包含層掘削並びに遺構検出作業開始。10月３日　遺構検出作業を終了し、遺構掘削開始。４日　遺構断面実測開始。11日　遺構の掘り下げ終了。遺構平面実測開始。13日　遺構実測の全てを終了。空中撮影実施。15日　残務整理を行い、現地調査を終了する。

３．基本堆積土層

基本堆積土層の観察は、調査区の北壁において実施した（第３図）。遺物包含層は、調査区中央部では耕作によって消滅しているものの、調査区の北側と東側に僅かな堆積が見られる。（黒岩）

Ⅰ層　表土層（耕作土）
Ⅱ層　黒褐色粘質土（遺物包含層）
Ⅲ層　黄褐色粘質土（遺構確認面）
Ⅳ層　灰白色粘土
Ⅴ層　青灰色粘土



第３図　基本堆積土層図（１/20）

第４図　発掘調査区域図（１/2,500）

４．遺構

検出された遺構は、古墳時代中期を中心とした掘立柱建物１棟、土坑21基、溝状遺構４条、ピット24基である。各遺構の分布状況は、中央地区の微高地上に掘立柱建物が延てられ、その北側に溝状遺構、西側と北東側に土坑が点在している。また、各溝状遺構は、調査区域が些少なため不明な点が多いものの、調査区外の南北方向へと延びている。

（１）掘立柱建物跡

SB01（第６図、図版２）

微高地上のX470・Y－840区に位置する。桁行２間（4.0m）、梁間１間（2.6m）の側柱式建物で、主軸方向はN－3°－Eを示す。柱掘りかたは略円形で、規模は径20～30cm、深さ15～25cmである。覆土は黒褐色粘質土の単層で、柱痕は確認されなかった。

（2）土坑

SK01（第7図、図版2）

X470・Y－840区に位置する。平面形は略長方形を呈し、規模は長軸1.47m、短軸0.89m、深さ15cmである。底面は起伏し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分かれ、全層に黄褐色粘質土がブロックで混入している。

SK02（第7図、図版2）

X480・Y－850区に位置する。遺構の西側が調査区外となり全容は不明である。遺構の上部は擂鉢状、下部は筒状に掘り込まれており、規模は東西1.35m以上、南北2.25m、深さ60～75cmである。覆土は人為堆積で6層に分かれる。遺物は高杯（1・2）が出土した。

SK03（第7図、図版2）

X480・Y－840区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.61m、短軸0.51m、深さ13cmである。底面は起伏し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土を基調とし、2層に分かれる。

SK04（第7図、図版2）

X480・Y－840区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.48m、短軸0.82m、深さ40cmである。壁面は大きくオーバーハングし、底面は起伏している。覆土は3層に分かれ、1層に炭化材を含む。遺物は高杯（3・4）、甕（5・6）が出土した。

SK05（第7図、図版2・3）

X490・Y－850区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.57m、短軸0.65m、深さ53cmである。壁面は大きくオーバーハングし、底面は東から西へ向かって深くなっている。遺物は高杯（7）、甕（8・9）が出土した。

SK06（第7図、図版3）

X490・Y－840区に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸1.38m、短軸1.15m、深さ32cmである。壁面は部分的にオーバーハングし、底面は2段に掘り込まれている。覆土は6層に分かれ、1～3層に炭化材を含む。遺物は高杯（10・11）、甕（12）、甑（13）が出土した。

SK07（第7図、図版2）

SB01の中央部に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.75m、深さ16cmである。覆土は2層に分かれる。

SK08（第7図、図版3）

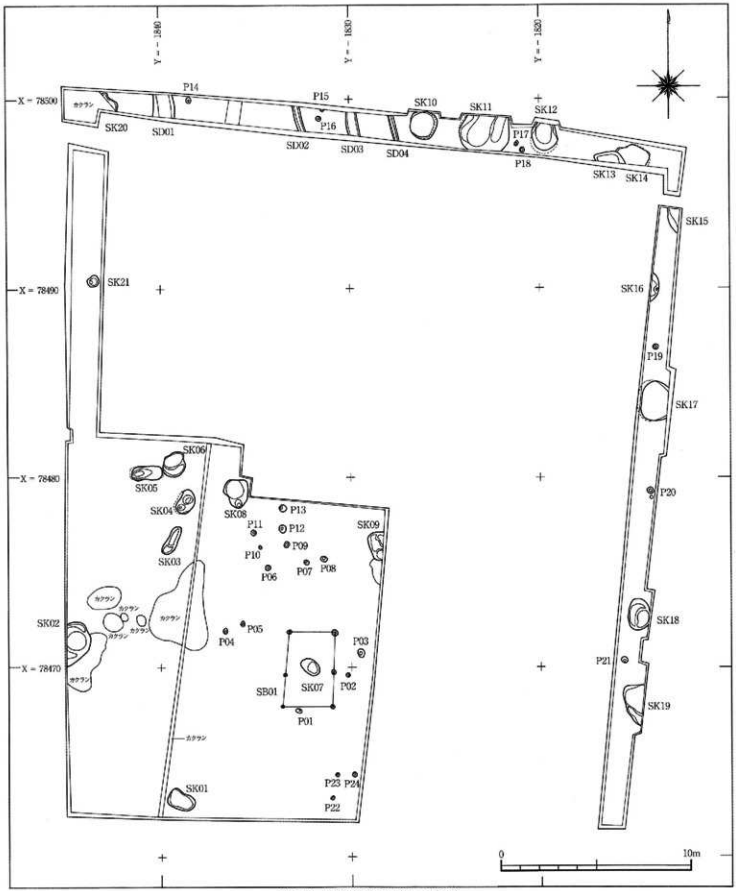
X480・Y－840区に位置する。全体的に円筒形を成し、南側の上端にテラス状の浅い掘り込みを有する。規模は長軸1.47m、短軸1.32m、深さ81cmである。覆土は5層に分かれ、3層に朽ち果てた自然木、5層に腐植質が混入していた。遺物は高杯（14～16）、壺（17）、甕（18・19）、珠洲焼（20）が出土した。

SK09（第8図、図版3）

X480・Y－830区に位置する。遺構の東側が調査区外となり全容は不明である。規模は東西0.7m以上、南北1.52m、深さ18cmで、底面は起伏している。

SK10（第8図、図版3）

X500・Y－830区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.73m、短軸1.45m、深さ63cmである。壁面は部分的にオーバーハングし、底面は概ね平坦である。覆土は6層に分かれ、4～6層に腐植質を含む。遺物は高杯（21～24）、器台（25）、壺（26・27）、小型壺（28）、甕（29・30）が出土した。



第5図　遺構全体図（1 /200）

SK11（第８図、図版４）

X 500・Y－830区に位置し、遺構の北側が調査区外となる。全容は不明なものの、断面観察によって埋め戻しの後、規模を縮小して土坑を再構築し、２期に亘り機能した事が判明した。１期の規模は東西2.75m、南北1.85m以上、深さ65cmである。壁面は部分的にオーバーハングし、底面は起伏している。２期の規模は不明瞭なものの、断面観察地点では東西2.05m、深さ50cmである。なお、２期の遺構底面（５層）に灰白色粘土が厚く貼られていることから、この時期では水溜的な機能を有したものと思われる。覆土は１～５層が２期、６～８層が１期である。遺物は高杯（31・32）、壺（33）、小型壺（34）、甕（35）、杯（36）が出土した。

SK12（第８図、図版４）

X500・Y－820区に位置する。遺構の北側が調査区外となり全容は不明である。平面形は略円形と考えられ、規模は東西1.33m、南北1.65m以上、深さ59cmである。壁面は大きくオーバーハングし、底面は概ね平坦である。覆土は２層に分かれ、下層に腐植質を多く含む。遺物は壺（37）、甕（38・39）が出土した。

SK13（第９図、図版４）

X500・Y－820区に位置し、SK14を切り込んでいる。遺構の南側が調査区外となり全容は不明である。規模は東西1.64m、南北0.62m以上、深さ49cmで、底面は起伏している。遺物は甕（40）が出土した。覆土は５層に分かれる。

SK14（第９図、図版４）

X500・Y－820区に位置し、SK13に切られている。遺構の南側が調査区外となり全容は不明である。規模は東西1.73m、南北1.00m以上、深さ53cmである。壁面は大きくオーバーハングし、底面は起伏している。覆土は５層に分かれる。

SK15（第９図、図版４）

X500・Y－820区に位置する。遺構の主体は東方向に在ると考えられ、詳細は不明である。規模は東西0.62m以上、南北1.25m以上、深さ11cmである。覆土は５層に分かれる。

SK16（第９図、図版５）

X490・Y－820区に位置する。遺構の西側が調査区外となり全容は不明である。規模は東西0.46m、南北1.56m、深さ34cmである。覆土は２層に分かれ、上層の黒褐色粘質土に鉄分の沈着が見られる。

SK17（第９図、図版５）

X490・Y－820区に位置する。遺構の東端が調査区外となり全容は不明である。平面形は円形と考えられ、規模は東西1.40m、南北2.10m、深さ42cmである。壁面は西側を中心に大きくオーバーハングし、底面は起伏している。遺物は高杯（41～44）、柱材（45）が出土した。この柱材を測定試料とし、AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した。

SK18（第９図、図版５）

X480・Y－820区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.61m、短軸1.25m、深さ59cmである。底面中央部は一段低く掘り込まれており、壁面は部分的にオーバーハングしている。遺物は高杯（46）が出土した。

SK19（第10図、図版５）

X470・Y－820区に位置する。遺構の東側が調査区外となり全容は不明である。規模は東西1.05m、南北2.05m、深さ68cmで、底面は起伏している。

SK20（第10図）

X500・Y－850区に位置する。遺構の大半が撹乱によって消滅し、不明な点が多い。規模は東西0.25m以上、南北1.18m、深さ35cmである。覆土は2層に分かれ、上層に炭化材を微量含む。

SK21（第10図）

X500・Y－850区に位置する。平面形は略円形で、長軸0.62m、短軸0.55m、深さ52cmである。覆土は黒褐色粘質土の単層である。

（3）溝状遺構

SD01（第10図、図版5）

X500・Y－840区に位置する。方向はN－7°－Wを示し、規模は長さ1.26m以上、幅1.15m、深さ49cmである。底面は僅かに起伏し、壁は垂直に立ち上がった後、擂鉢状に開く。覆土は6層に分かれ、下層付近の堆積状況から水が流れていた様子が窺われる。遺物は壺（47）が出土した。

SD02（10図、図版5）

X500・Y－840区に位置する。方向はN－10°－Eを示し、規模は長さ1.47m以上、幅0.35m、深さ28cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

SD03（第10図）

X500・Y－830区に位置する。方向はN－6°－Eを示し、規模は長さ1.25m以上、幅0.62m、深さ10cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。

SD04（第10図）

X500・Y－830区に位置する。方向はN－7°－Eを示し、規模は長さ1.38m以上、幅0.28m、深さ11cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。

（4）ピット（第5図、表3）

ピットは24基が検出された。この内、SB01の周辺に存在するピット群は、掘立柱建物の一部を構成する可能性がある。各ピットの規模等は、表3に取りまとめた。

5．遺構出土遺物（第11～13図、図版6～8）

出土土器は珠洲焼の甕が1点（20）あるものの、その他は全て古墳時代の土師器である。

SK02　1・2は高杯である。1は中実柱状脚の裾部で、外面にヨコナデを施す。2は脚部内面に段を持ち、外面にナデを施す。

SK04　3・4は高杯、5・6は甕である。3は「ハ」字状に開く脚部で、外面にヨコナデ、内面にハケメを施す。4は脚部で内面に粘土接合痕が残る。5は長い口縁部が直線的に開き、端部を丸く収める。6は直立気味に伸びて途中で屈曲外反する口縁で、肩部内面に粘土接合痕が残る。

SK05　7は高杯、8・9は甕である。7は脚部で内面に粘土接合痕が残る。8は「く」字状口縁を持ち、胴部外面に縦位のハケメを施す。9は平底の底部で外面にナデ、内面にハケメを施す。

SK06　10・11は高杯、12は甕、13は甑である。10は「ハ」字状に開く脚部で、裾部で屈曲外反する。外面にミガキを施し、内面に粘土接合痕が残る。11は椀状に開く杯部で、下部にやや稜がある。12は胴下部外面にケズリ、内面にハケメを施す。13は底部に径1.2cmの円孔を穿ち、外面にナデ、内面にハケメを施す。

SK08　14～16は高杯、17は壺、18・19は甕、20は珠洲焼である。14は「ハ」字状に開く脚部で、やや丸みを持ち、裾部で屈曲外反する。外面にミガキを施す。15は「ハ」字状に開く脚部で、裾部で屈曲外反する。外面にミガキを施し、内面に粘土接合痕が残る。16は杯部が椀状で、下部にやや稜がある。内外面にミガキを施す。17は有段口縁で、口縁部と凸帯端部にキザミ、外面にナデ、内面にミガキを施す。18・19は「く」字状口縁を持ち、口縁部内外面にヨコナデ、胴部内外面にハケメを施す。20は甕の

体部片で、外面に平行叩き、内面に方形状の当具痕が見られる。

SK10 21～24は高杯、25は器台、26・27は壺、28は小型壺、29・30は甕である。21は「ハ」字状に開く脚部で、裾部が屈曲外反し、外面にミガキが施される。22は杯部下部に稜が見られ、脚部は丸みを持ち「ハ」字状に開く。23は柱状の脚部で、内面にケズリが見られる。24は「ハ」字状に開く脚部で、裾部は弱く屈曲外反する。25は杯部に内外面にヨコナデ、脚部外面にミガキを施す。26は口縁下部に凸帯を持つ有段口縁で、口縁部外面にハケメの後ヨコナデ、内面にハケメを施す。27は丸底球胴の体部で、肩部にナデ、胴部上位に横位ヘラケズリを施す。28は外方へ短く直線的に伸びる口縁に、潰れた体部が付き、底部は平底である。胴部外面にナデ、下部に指頭圧痕が見られる。29は「く」字状口縁で、口縁端部を丸く収める。体部は球形に近い。30は「く」字状口縁で、口縁下端～肩部にかけて指頭圧痕、体部外面にハケメが見られる。

SK11 31・32は高杯、33は壺、34は小型壺、35は甕、36は杯である。31は「ハ」字状に開く脚部で、裾部は屈曲外反する。32は杯部が椀状で、脚部は「ハ」字状に開き、脚部内面に段を持つ。杯部内外面にナデ、脚部外面にミガキを施す。33は丸底球胴の体部である。34は外方へ直線的に伸びる口縁を持ち、胴部の最大径は中位にくる。35は「く」字状口縁を持ち、胴部外面にハケメ、内面にナデを施す。36は口縁部が直立気味で、底部の接地面はやや扁平である。

SK12 37は壺、38・39は甕である。37は有段口縁で、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にハケメを施す。38は「く」字状口縁を持ち、端部を丸く収める。口縁部内外面にヨコナデ、胴部内外面にハケメ、肩部内面に指頭圧痕が見られる。39は「く」字状の口縁を持ち、口縁端部を丸く収める。口縁部外面にヨコナデ、胴部にハケメ調整の後ヘラによるミガキ状のナデを施す。

SK13 40は外反する甕の口縁部で、外面にハケメ、内面にミガキを施す。

SK17 41～44は高杯で、45は柱材である。41は杯部が椀状で、下端に凸帯を持ち、口縁端部がやや外反気味である。42は杯部が直線的に開くタイプである。杯部内外面に赤彩、脚部上端に斜状のミガキを施す。43は丸みを帯びて「ハ」字状に開く脚部で、裾部は大きく屈曲外反し長い。44は杯部が椀状で、口縁端部が弱く外反し、脚部は「ハ」字状に開く。杯部は内外面にヨコナデ、脚部は外面にミガキ、内面にハケメを施す。45は芯持の柱材で、下端を斧で削り込んでいる。

SK18 46は高杯で椀状である。口縁端部が外反気味となり、下部に緩味な段が見られる。内面にハケメの後、ヨコナデを施す。

SD01 47は壺の底部で、内外面に緻密なハケメを施す。

Ⅳ　自然科学分析

上坑出土木製品のAMS法による放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze ・ Ineza Jorjoliani・佐々木由香

1．はじめに

富山市東老田Ⅰ遺跡のSK17（粘土採掘坑）より検出された柱材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、試料の調整は山形、瀬谷、Zaur 、Ineza 、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は佐々木、伊藤がまとめた。

2．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。

試料はSK17の覆土から出土した柱材である。柱材は直径11～13cm 程の芯持丸木材で、樹皮は残存していない。試料は、山武考古学研究所により最外年輪付近から採取された。SK17からは柱材と共伴して土器が出土しており、これらの遺物は粘土採掘坑に廃棄されたことが考えられている。また土器の年代は5世紀中頃とされている。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDII）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料及び処理

測定番号	遺構データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5790	遺構：生産遺構（粘土採掘坑） SK17	試料の種類:生試料・材（柱材） 試料の性状：最外年輪付近 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N）	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

3．結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD 5790	-25.36 ± 0.19	1645 ± 20	385AD (68.2%) 430AD	330AD (90.3%) 440AD 480AD (5.1%) 530AD	1646 ± 22

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

柱材の年代は^{14}C年代で1,645±20yrBP、暦年代では1σ（68.2%の確率）の年代範囲で385-430calAD、2σ（95.4%の確率）の年代範囲で330-440calAD（90.3%）であった。較正曲線をみると、1σの範囲にピークがみられることから、4世紀後半から5世紀前半の年代範囲の確率が高い（図1）。

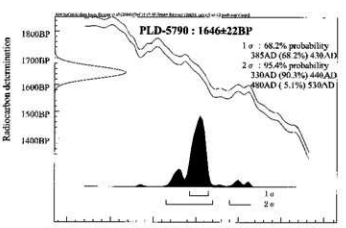


図1　暦年較正結果

測定した試料は柱材の最外年輪付近から採取されたため、柱材とされた木材の伐採年代とほぼ同じ年代と考えられる。柱材の廃棄された年代は、使用年代を加味すると木材の伐採年代とは開きがあることが想定されるため、注意が必要である。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

V　総括

今回の調査によって、古墳時代中期の掘立柱建物１棟、土坑21基、溝状遺構４条、ピット24基が検出された。各遺構の分布状況は、中央地区の微高地上に掘立柱建物が建てられ、その北側に溝状遺構、西側と北東側に土坑が点在している。

１．遺構

掘立柱建物は桁行２間、梁間１間の側柱式で、作業場的な施設である。１棟として取り扱ったものの、この建物の周辺には配列を追うことができなかったピット群が点在しており、このピット群が新たな掘立柱建物の一部を構成する可能性がある。

遺構の主体となる土坑は、壁面がオーバーハングして断面形がフラスコ状を呈するものが多く、灰白色粘土層（Ⅳ層）もしくは青灰色粘土層（Ⅴ層）まで掘り込まれ、その後の埋没過程では土器や木器が廃棄されている。この様相から土坑群の多くは粘土採掘坑と考えられ、その形状は略円形、略方形、不整形と様々である。また、粘土採掘法については、「第１段階　竪坑の掘削の後、低部の粘土掘削。第２段階　壁部分の粘土掘削。第３段階　掘削坑の拡張及び旧坑の埋め戻し。第４段階　拡張部分の採掘」（原　1983）という見解があるが、当遺跡では第１・２段階の方法によるものが主体的であり、第４段階を踏襲したものはSK13・14と思われる。

溝状遺構は、調査区域が些少であるため不明な点が多いものの、方向はいずれも南北方向を指向し、土坑群の北西側において検出されている。機能的には、粘土採掘に係わる排水などを目的としたものではなかろうか。

この様な状況から前述の遺構群は、古墳時代中期の粘土採掘に係わる生産関連遺構であり、その広がりは掘立柱建物の北西方向を中心に延びるものと推察される。

２．遺物と年代

出土遺物は土師器の高杯、甕、壺を主体とし、鉢、小型壺、杯などがある。高杯は、杯下部に凸帯を持ち一部に赤彩を施したものも見られ、脚部は「ハ」字状で裾部は屈曲外反しているものが多い。調整はミガキが主体であるが、一部ハケメ調整後にヨコナデを施すものもある。甕は「く」字状口縁を持ち、口縁端部を丸く収めるものが多いが、口縁部が直立気味に伸びて途中で屈曲外反するものが見られる。調整はハケメを基本とし、ハケメ調整後にヘラによる丁寧なナデを施すもの、体部下半をヘラケズリするものがある。壺は口縁下部に凸帯状の段を持つ有段口縁で、17は口縁部と凸帯端部にキザミが見られる。

この様な技法や器種構成、器種の特徴は、小矢部市五社遺跡（富山県文化振興財団　1998）の出土遺物に類似している。五社遺跡出土の土器群は、県中央では北野遺跡と同時期に位置づけられ、北陸では南加賀地域を主体とした田嶋編年で、古墳時代３様式１期（漆町編年11～12群）に該当するものと考えられている（三島　1998）。よって、当遺跡出土の土器群も、五社遺跡とほぼ同時期の5世紀中葉の所産と考えられる。

また、SK17から出土した柱材（45）について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。この柱材は芯持丸木材で、樹皮は残存していないものの、測定試料は最外年輪付近から採取したもので、測定試料は柱材とされた木材の伐採年代とほぼ同時期と考えられる。柱材の年代は、較正曲線を見ると１σの範囲にピークが見られることから、４世紀後半～５世紀前半の年代範囲の確立が高いことが示された。ただし、柱材が廃棄された年代は、使用年代を加味すると伐採年代より新しくなることから、前述した土器の年代により近づくものと推察される。　（桐谷）

表3　ピット一覧表

遺構番号	位置	平面形状	計測値（cm）			覆土	備考
			長軸	短軸	深さ		
P01	X430・Y－840	楕円形	35	23	13	黒褐色粘質土	
P02	X470・Y－830	円形	20	21	15	黒褐色粘質土	柱穴状
P03	X480・Y－830	楕円形	45	35	29	黒褐色粘質土	
P04	X480・Y－840	楕円形	30	20	19	黒褐色粘質土	柱穴状
P05	X480・Y－840	楕円形	30	20	18	黒褐色粘質土	柱穴状
P06	X480・Y－840	円形	31	30	25	黒褐色粘質土	柱穴状
P07	X480・Y－840	円形	25	22	30	黒褐色粘質土	柱穴状
P08	X480・Y－840	円形	28	25	30	黒褐色粘質土	柱穴状
P09	X480・Y－840	円形	30	25	18	黒褐色粘質土	柱穴状
P10	X480・Y－840	円形	20	15	25	黒褐色粘質土	柱穴状
P11	X480・Y－840	円形	27	24	16	黒褐色粘質土	柱穴状
P12	X480・Y－840	円形	45	40	25	黒褐色粘質土	柱穴状
P13	X480・Y－840	円形	34	32	45	黒褐色粘質土	柱穴状
P14	X500・Y－840	円形	30	25	18	黒褐色粘質土	柱穴状
P15	X500・Y－840	円形	25	25	26	黒褐色粘質土	柱穴状
P16	X500・Y－840	円形	25	23	33	黒褐色粘質土	柱穴状
P17	X500・Y－830	円形	24	20	20	黒褐色粘質土	柱穴状
P18	X500・Y－830	円形	27	24	30	黒褐色粘質土	柱穴状
P19	X490・Y－820	円形	29	25	30	黒褐色粘質土	柱穴状
P20	X480・Y－820	円形	35	30	15	黒褐色粘質土	
P21	X480・Y－820	円形	33	27	30	黒褐色粘質土	柱穴状
P22	X470・Y－840	円形	21	18	18	暗褐色粘質土	柱穴状
P23	X470・Y－840	円形	24	20	18	黒褐色粘質土	柱穴状
P24	X470・Y－830	円形	25	21	16	黒褐色粘質土	柱穴状

表4　土器観察表

	出土遺構	種別	器種	計測値（cm）			胎土	色調	焼成	特徴	備考
				口径	底径	器高					
1	SK02	土師器	高杯	－	13.0		微砂粒	淡黄橙	良好	脚裾部外面ヨコナデ	
2	SK02	土師器	高杯	－	－	－	長石粒	灰白	良好	脚部外面ナデ	
3	SK04	土師器	高杯	－	15.0		微砂粒	にぶい橙	不良	裾外面ヨコナデ，内面ハケメ	
4	SK04	土師器	高杯	－	－	－	石英細粒	淡黄橙	良好		
5	SK04	土師器	坩	(13.4)	－	－	長石粒	淡黄橙	良好	外面ナデか	
6	SK04	土師器	甕	(16.0)	－	－	石英粒	褐灰	不良		
7	SK05	土師器	高杯	－		－	微砂粒	淡黄橙	良好		外面摩耗
8	SK05	土師器	甕	(18.6)	－	[5.5]	石英・長石粒を含む細砂粒	にぶい橙	良好	脚部外面ハケメ	
9	SK05	土師器	甕	－	(6.8)	[2.7]	微砂粒	にぶい褐	良好	外面ナデ，内面ハケメ	
10	SK06	土師器	高杯	－	－	－	微砂粒	淡黄橙	やや不良	脚部外面ミガキ	
11	SK06	土師器	高杯	(14.0)	－	－	長石・石英粒	にぶい橙	良好	杯部内外面ミガキ	
12	SK06	土師器	甕	－	－	－	砂粒，繊維少量	褐灰	不良	胴部外面下半ヘラケズリ，内面ハケメ	
13	SK06	土師器	甑	－	－		石英粒	淡黄橙	良好	外面ナデ，内面ハケメ	
14	SK08	土師器	高杯	－	－	－	石英細粒	淡黄橙	良好	脚部外面ミガキ	
15	SK08	土師器	高杯	－	－	－	石英を含む砂粒	淡黄橙	良好	脚部外面ミガキ	
16	SK08	土師器	高杯	(18.6)	－	－	微砂粒，海綿骨針微量	外：黒 内：にぶい橙	良好	杯部内外面ミガキ	脚部被指後黒化
17	SK08	土師器	壺	(24.2)	－	－	石英主体の砂粒	にぶい橙	良好	口縁部と凸帯の境界にキテミ，口縁部外面ナデ，内面ミガキ	
18	SK08	土師器	甕	(16.2)	－	－	長石粒	にぶい橙～黒色	良好	口縁部内外面ヨコナデ，胴部内外面ハケメ	
19	SK08	土師器	甕	(17.4)	－	[6.0]	長石粒	にぶい橙	良好	口縁部外面ヨコナデ，胴部内外面ハケメ	
20	SK08	瑞浪焼	甕	－	－	－	精良・緻密	オリーブ灰	良好	外面平行叩き	
21	SK10	土師器	高杯	－	(11.9)	[10.0]	白色小礫少量	にぶい橙～黒	良好	脚部外面ミガキ	
22	SK10	土師器	高杯	－	－	－	微砂粒	淡黄橙	良好		外面摩耗
23	SK10	土師器	高杯	－	－	－	長石礫	淡黄橙	良好	脚部外面ミガキ，内面ケズリ	
24	SK10	土師器	高杯	－	－	－	石英・長石粒	淡黄橙	良好	脚部外面ミガキ	
25	SK10	土師器	器台	(12.5)	－	15.2]	長石・石英粒	褐灰	良好	杯部内外面ヨコナデ，脚部外面ミガキ	

	出土遺構	種別	器種	計測値（cm）			胎土	色調	焼成	特徴	備考
				口径	底径	器高					
26	SK10	土師器	壺	(15.4)	－		微砂粒、海綿骨針微量	浅黄橙	良好	口縁部外面ハケメ後ヨコナデ、内面ハケメ	
27	SK10	土師器	壺	－	－	[13.0]	長石・石英粒	明褐灰	良好	肩部ナデ　胴上部横位ヘラケズリ	四下半部器面剥離
28	SK10	土師器	小型壺	7.4	3.5	7.2	石英粒、海綿骨針	浅黄橙	良好	胴部外面ナデ、下端指頭圧痕	
29	SK10	土師器	甕	14.8	－	15.3	長石粒、海綿骨針微量	褐灰	良好	口縁部ヨコナデ　胴上部ナデ　頂位ヘラケズリ　胴下半部ハケメ、底部ヘラケズリ	
30	SK10	土師器	甕	(19.3)	－	[9.6]	長石・石英微粒	外：黒 内：にぶい橙	良好	杯部外面ハケメ	
31	SK11	土師器	高杯	－	(12.0)	－	長石粒、灰色礫	にぶい橙	不良	脚裾部ミガキ	
32	SK11	土師器	高杯	(16.4)	－	－	長石・白英粒、海綿骨針微量	浅黄橙	良好	杯部内外面ナデ、脚部外面ミガキ	
33	SK11	土師器	壺	－	－	－	細砂粒	にぶい褐～橙	不良	丸底	
34	SK11	土師器	小型壺	(10.0)	1.0	8.0	長石粒	にぶい橙	良好	外面ナデ	内面黒化
35	SK11	土師器	甕	(16.0)	－	－	石英・長石粒を含む細砂粒	浅黄橙	良好	胴部外面ハケメ、内面ナデ	
36	SK11	土師器	杯	－	－	－	微砂粒	明褐灰	やや不良	外面ナデ、丸底の接地面やや平底気味	
37	SK12	土師器	壺	18.6	－	[6.7]	長石を含む細砂粒	明褐灰	良好	口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ	
38	SK12	土師器	甕	17.0	－	23.0	長石・石英粒を含む砂粒	外：黒 内：褐灰	良好	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ハケメ	胴部外面煤付着
39	SK12	土師器	甕	18.6	－	[28.5]	砂粒多量	外：黒～褐 内：にぶい橙	良好	口縁部外面ヨコナデ、胴部ハケメ調整後ヘラによるミガキ状のナデ	
40	SK13	土師器	甕	(26.0)	－		微砂粒、海綿骨針	褐灰	良好	口縁部外面ハケメ、内面ミガキ	
41	SK17	土師器	高杯	20.8	－	6.6]	石英粒を含む細砂粒	浅黄橙	良好	杯部外面ヨコナデ、脚部ミガキ、杯部内外面・脚部赤彩	
42	SK17	土師器	高杯	17.0	－	15.9]	石英粒、海綿骨針微量	にぶい橙	良好	杯部内外面赤彩、脚上部斜位のミガキ	
43	SK17	土師器	高杯	－	(15.0)	－	長石粒	浅黄橙	やや不良		
44	SK17	土師器	高杯	16.2	12.0	10.3	石英・長石粒、海綿骨針微量	浅黄橙	良好	杯部口縁部ヨコナデ、脚部外面ミガキ	
46	SK18	土師器	高杯	18.3	－	[6.2	長石粒	明褐灰	良好	杯部内面ハケメ後ヨコナデ	
47	SD01	土師器	壺	－	(3.9)	[2.1]	長石粒	灰白	良好	胴部内外面ハケメ	

※計測値欄の（）は推定値、［］は現存値を示す。

表5　木製品観察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	種別	木取り	長さ（cm）	径（cm）	備考
45	SK17	覆土	柱材	芯持丸材	19	11.5	柱根

参考文献

原　雅信ほか　1983　『戟山東遺跡』　群馬県考古資料普及会

楠瀬　勝暁修　1997　『小杉町史通史編』　小杉町役場

富山県文化振興財団　1998　『五社遺跡発掘調査報告』

富山市教育委員会　2000　『富山市中老田C遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2002　『東老出II遺跡』

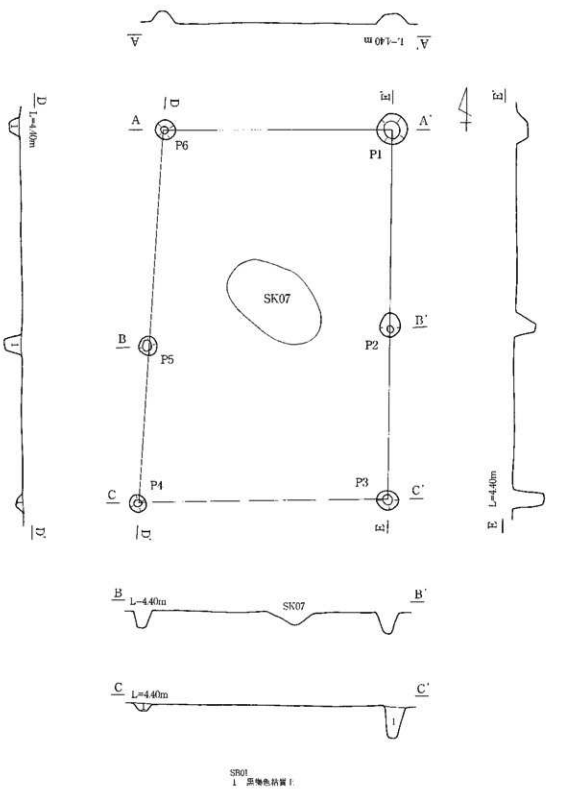
富山市教育委員会　2002　『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書III』

富山市教育委員会　2002　『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』

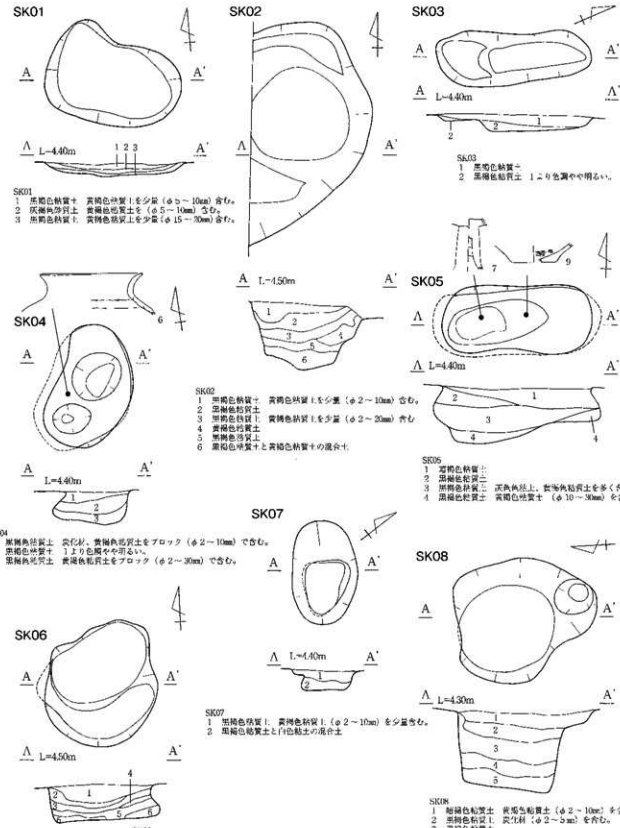
小杉町教育委員会　2002　『黒河・中老田遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2005　『富山市願海寺城跡発掘調査報告書』

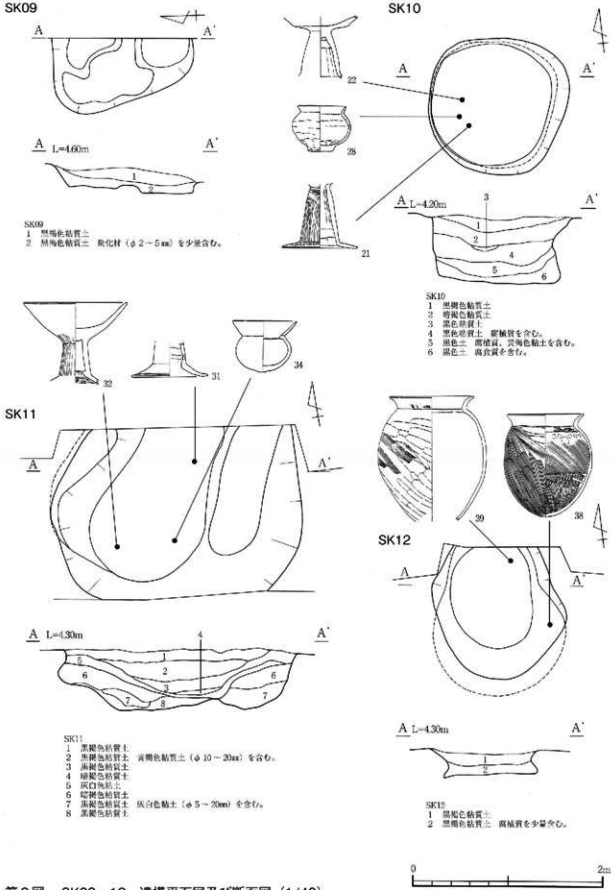
SB01



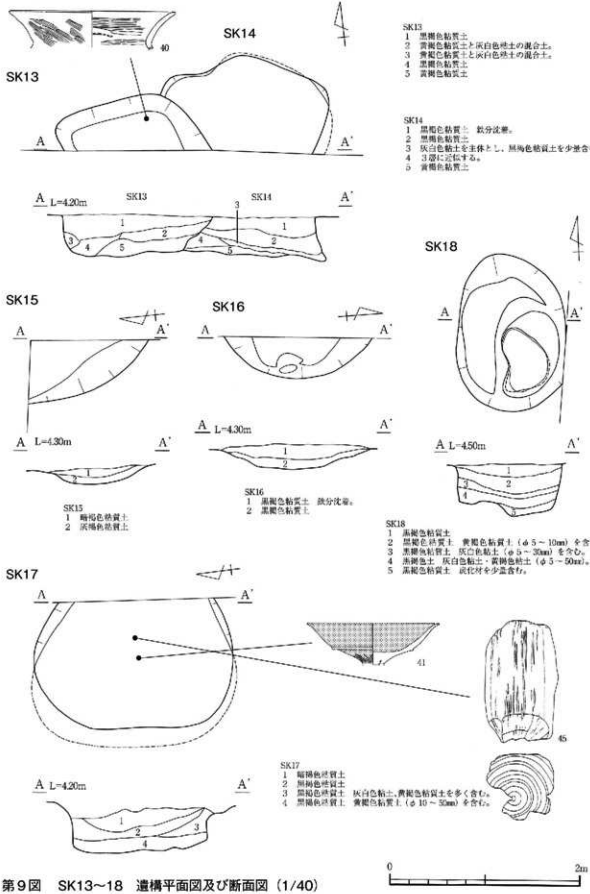
第6図　SB01　遺構平面図及び断面図（1/40）



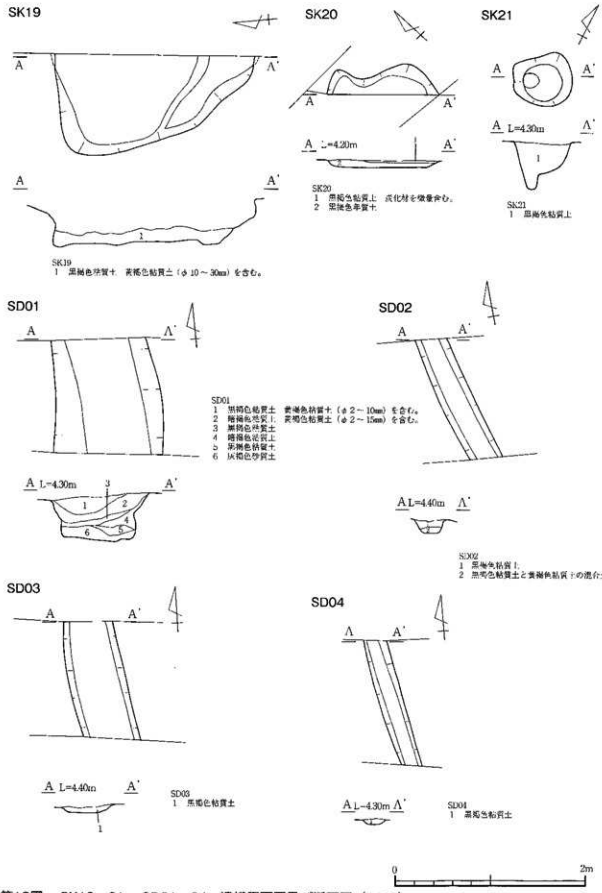
第7図　SK01～08　遺構平面図及び断面図（1/40）



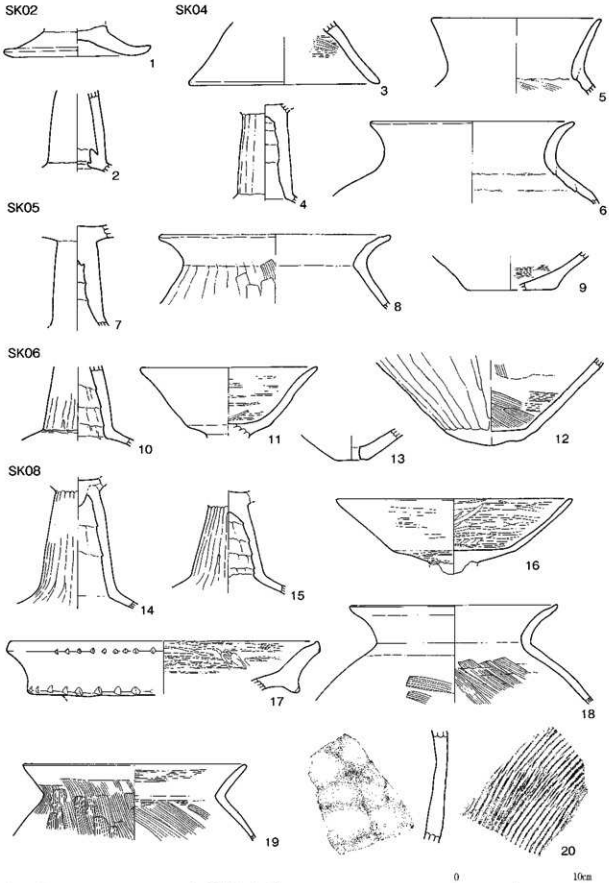
第8図　SK09～12　遺構平面図及び断面図（1/40）



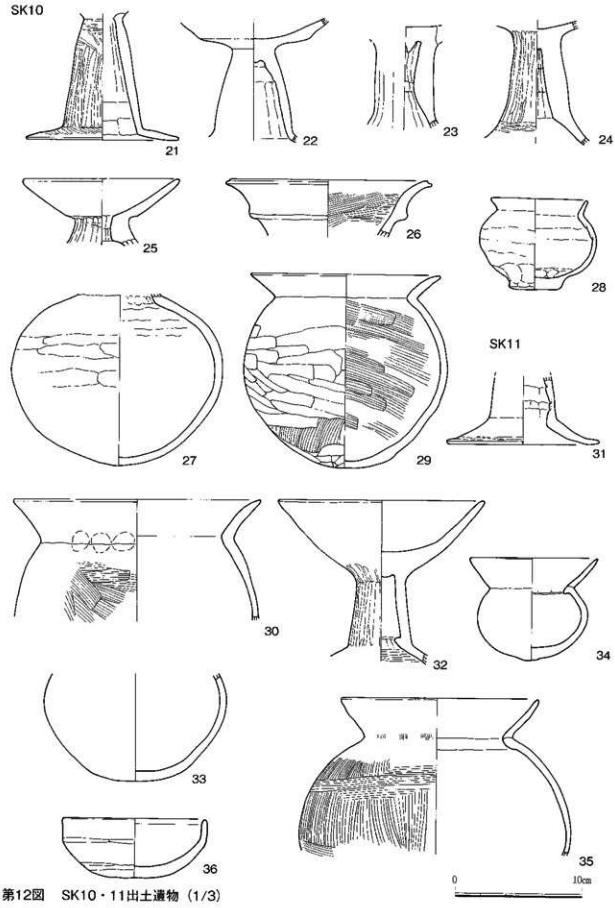
第9図　SK13～18　遺構平面図及び断面図（1/40）



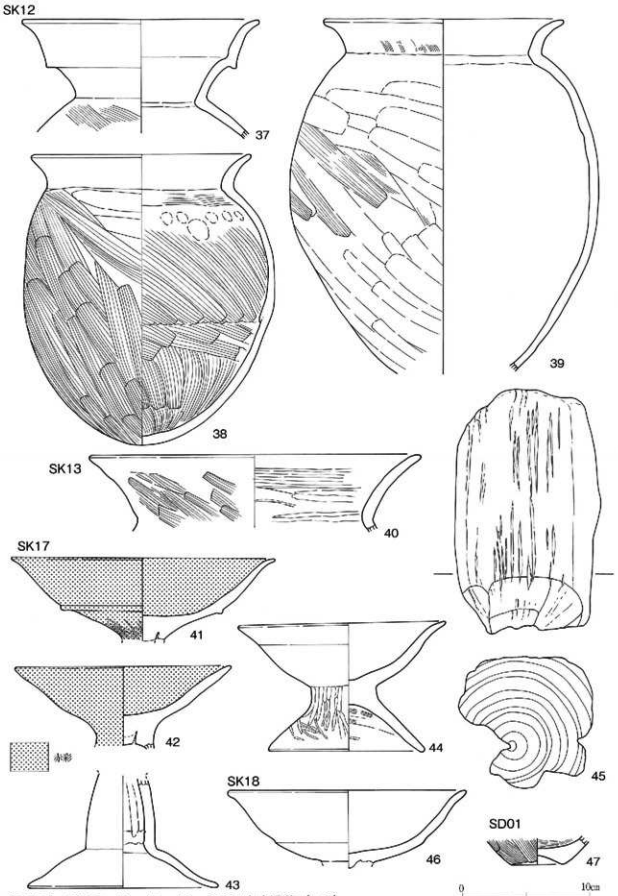
第10図　SK19～21、SD01～04　遺構平面図及び断面図（1/40）



第11図　SK02、04～06、08出土遺物（1/3）



第12図　SK10・11出土遺物（1/3）



第13図　SK12・13・17・18・SD01出土遺物（1/3）

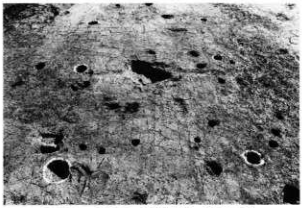
東老田Ⅰ遺跡周辺（空撮・西から）

発掘調査区全景（上が東）

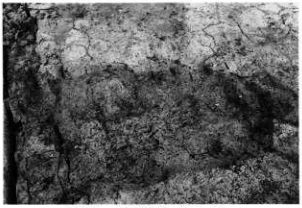
図版2（遺構）

北側調査区全景（東から）

東側調査区全景（南から）

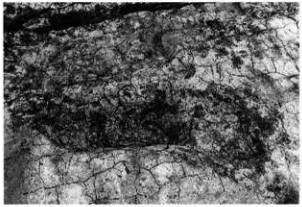


SB01・SK07　完掘状況（南から）



SK01　完掘状況（南から）

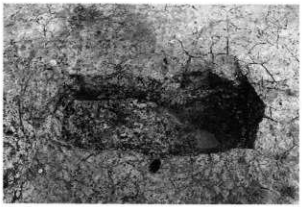
SK02　完掘状況（北から）



SK03　完掘状況（北から）

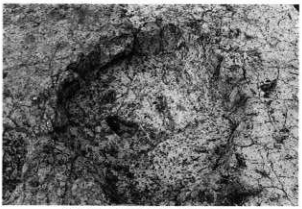
SK04　完掘状況（東から）

SK05　遺物出土状況（南から）



SK05　完掘状況（北から）

SK06　断面（北から）



SK06　完掘状況（南から）

SK08　断面（西から）

SK08　完掘状況（北から）

SK09　断面（西から）

SK10　断面（南から）

SK10　遺物出土状況（東から）

図版4（遺構）

SK11　断面（南から）

SK11　完掘状況（東から）

SK12　遺物出土状況（南から）

SK12　遺物出土状況（北から）

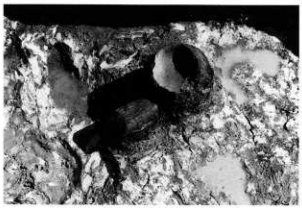
SK12　完掘状況（東から）

SK12　完掘状況（北から）

SK13・14　完掘状況（北から）

SK15　完掘状況（西から）

SK16　完掘状況（西から）



SK17　遺物出土状況（西から）

SK17　遺物出土状況（西から）

SK18　完掘状況（西から）

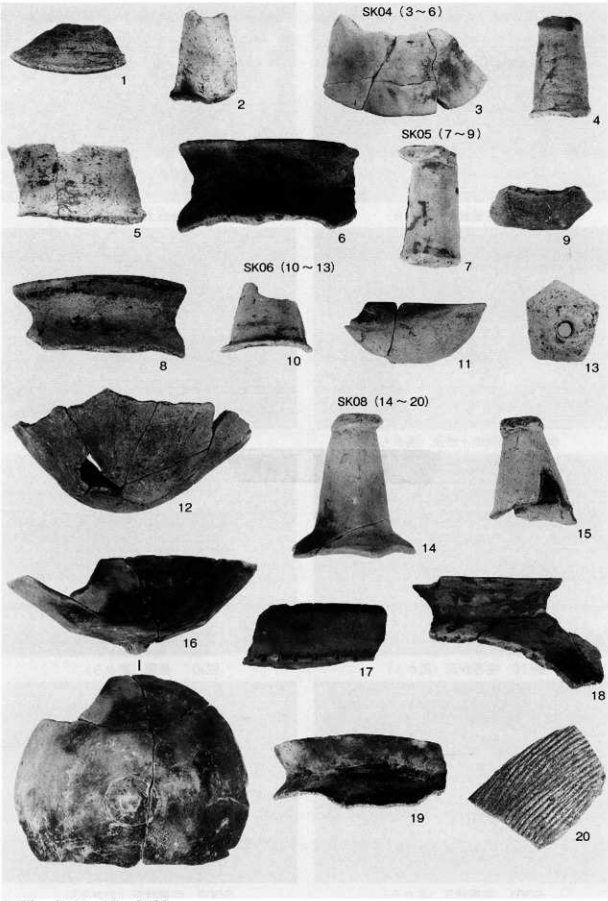
SK19　完掘状況（西から）

SD01　断面（南から）

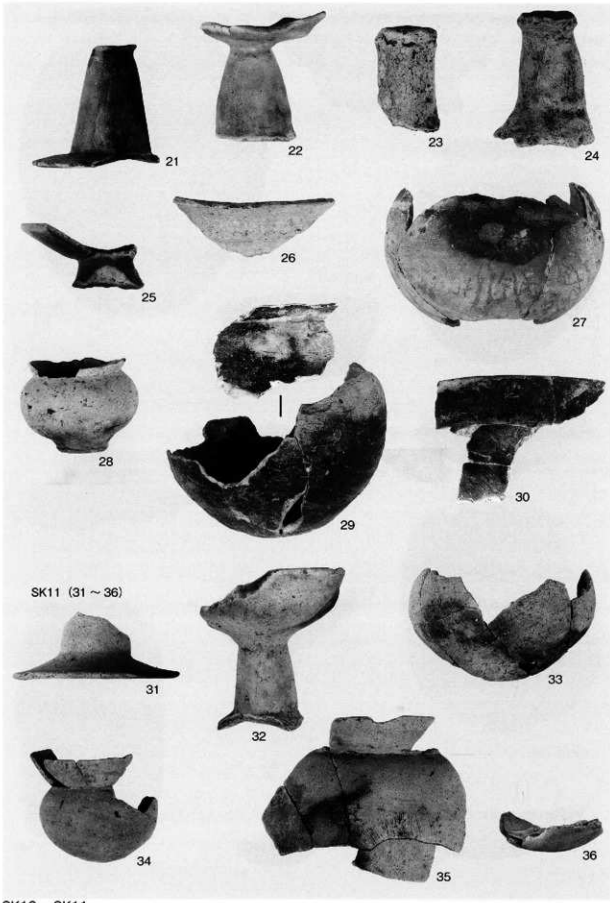
SD01　完掘状況（北から）

SD02　完掘状況（北から）

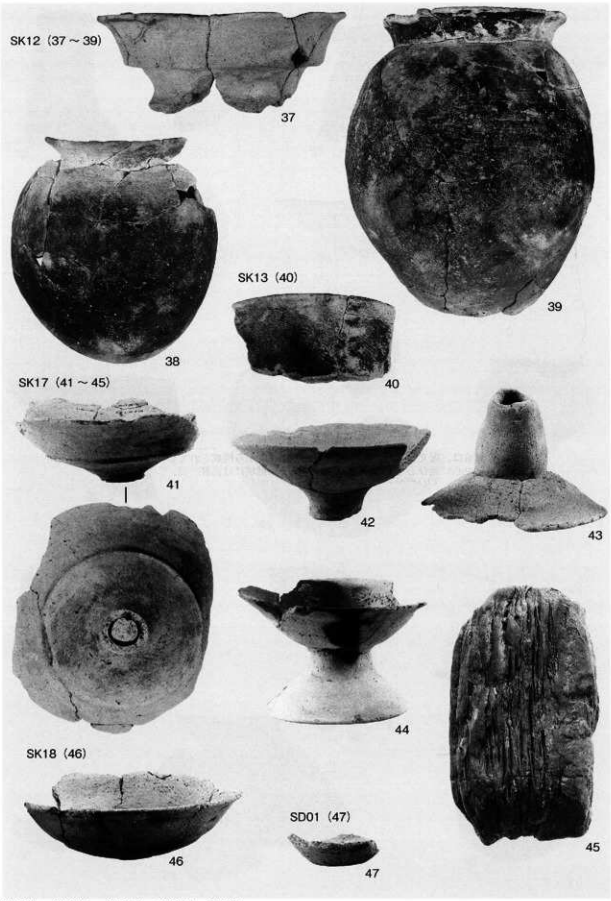
図版6（遺物）



SK02・SK04～06・SK08



SK10・SK11



SK12・SK13・SK17・SK18・SD01

報告書抄録

ふりがな	とやましひがしおいだいちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市東老田Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	12
編著者名	桐谷 俊、黒岩 拓也、岩崎 誉尋
編集機関	(有)山武考古学研究所
所在地	〒286－0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL 0476－24－0536
発行機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
所在地	〒930－0091 富山県富山市愛宕町一丁目2－24番 TEL 076－442－4246
発行年月日	西暦2006年7月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
富山市東老田(ひがしおいだ)Ⅰ遺跡	富山市東老田(ひがしおいだ)	162019	201072	36度 42分 26秒	137度 08分 46秒	20050926 ～ 20051015	478㎡	店舗建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東老田Ⅰ遺跡	生産関連遺跡	古墳	掘立柱建物 1棟 土坑 21基 溝状遺構 4条 ピット 24基	土師器 高杯・壺・甕 木 器 柱材	検出された土坑の多くは、古墳時代中期の粘土採掘坑であり、覆土中から高杯、壺、甕等が出土した。掘立柱建物や溝状遺構についても、粘土採掘に関連した生産遺構と考えられる。
		中世		珠洲焼 甕	
		不明	ピット		

要約

調査の結果、本遺跡は古墳時代中期の粘土採掘を行った生産遺跡であることが判明した。この生産遺構は、掘立柱建物や粘土採掘坑、溝状遺構から構成されており、その広がりは遺跡の北東方向を中心に延びるものと推察される。粘土採掘坑には高杯、壺、甕といった多くの土器が廃棄されており、SK17では高杯に共伴して柱材が出土している。今回、この柱材を用いてAMS法による放射炭素年代測定を実施した。測定資料は柱材の最外年輪付近から採取したもので、柱材とされた木材の伐採年代とほぼ同じ年代と考えられる。測定の結果、較正曲線を見ると1σの範囲にピークが見られることから、4世紀後半から5世紀前半の年代範囲の確立が高いことが示された。土器による年代は5世紀中葉と考えられ、測定値とはやや開きがある。しかし、柱材の廃棄された年代は、使用年代を加味すると木材の伐採年代とは開きがあることが想定されている。

富山市東老田Ⅰ遺跡発掘調査報告書

2006（平成18）年7月31日発行

編 集 (有)山武考古学研究所
千葉県成田市並木町221

発 行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
富山市愛宕町一丁目2－24

印 刷 松木印刷工業㈱